

マスク生活では子どもの脳と心が育たない!?

「新しい生活様式」が子どもにも与える影響

二〇二〇年から続いたマスク生活にもようやく終わりが見えてきた。「やっと煩わしいマスクから解放される」と、ホッとしている大人は多いはず。大人にとってはただ不便と感じるだけだったマスク生活かもしれないが、子どもたちの脳と心の発達に影響を及ぼす可能性があるという。

京都大学大学院教育学研究科教授

明和政子

●みょうわ・まさこ 京都大学教育学部卒。同大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)。京都大学霊長類研究所研究員、京都大学大学院教育学研究科准教授などを経て、同大学院教授。単著に『ヒトの発達の謎を解く』(ちくま新書)『マスク社会が危ない』(宝島新書)など。

「新しい生活様式」と子どもたち

——明和先生は、コロナ禍に登場した「マスク生活」や「ソーシャルディスタンス」が子どもたちの発育に影響を及ぼす可能性があるかと警鐘を鳴らしてこられました。

新型コロナウイルスの感染拡大が広がっていた二〇二〇年五月に、政

府は「新しい生活様式」の実践を提唱しました。皆さんご存じの通り、主な項目としては「身体的距離の確保」「マスクの着用」「手洗い」です。これが大人だけでなく、子どもたちにもそのまま適用されることになったんですね。

子どもたちは、環境の影響を強く受けながら脳を発達させています。ですから、子どもは単なる大人のミ

ニチュアのような存在ではありません。例えば、乳幼児期は、他者の多様な表情を見て真似しながら、心を理解したり共感したりするようになっていく。ヒト特有の社会性を身につけていく極めて重要な時期なのです。

しかし日本では、科学的エビデンスに基づき、子どもの立場に立った対策が必要であるという発想が出て

こなかった。この三年間で私を感じたのは、日本がいかに大人中心の社会だったのかということ。マスク着用の問題に限らず、日本社会は、大人にとって「便利」「心地よい」というような発想で押し進められているような気がしています。

例えば、新型コロナウイルスのパンデミックが始まった年、フランスでは政府が科学者や保育教育現場の専門家とともに「マスクでの生活が子どもの発達に与えるリスク」を議論していました。そして、その結果を受けて、国が透明なマスクを一斉配布したのです。

——フランスで透明なマスクが配布されていたという話は、いま初めて聞いたような気がします。

そうですね。日本のメディアではあまり紹介されなかったのではないかと思います。実際のところ、透明

型のマスクはあまりつけ心地が良くないようです。しかし、次世代を担う子どもたちは国の宝であって、大人の脳と子どもの脳は違うものである。子どもたちに特化した施策が必要なのではないか。フランスの取り組みには、子どもたちへの確かな思いが感じられますよね。

そういう動きは、日本ではまったく出てこなかった。政治家は政治の分野で、医師は医療の現場で、保育は保育現場で、という縦割り組織内での活動にとどまっていたと思います。多様な専門家が集まって議論をするという文化があまり育っていないことを実感しました。気候変動、少子化、感染症、戦争……さまざまなりリスク予測が難しい、不確かな時代を迎えている今、そうした既存のつながりだけで解決することは不可能でしょう。

子どもの脳の特徴

——子どもの脳と大人の脳は違うということですが、子どもの脳の特徴とはどのようなところでしょうか？

ヒトの脳は環境の影響を受けながら、長い時間をかけて将来どのような脳を持つかを決めていきます。

よく子育て本などで、「生後半年頃にはこんなことができ、一歳頃にはこんなことができる」といったように、脳は年齢とともに右肩上がりに、直線的に発達するように書かれていることがあります。しかし、これは生物学の視点から厳密にいうと正しくありません。ヒトの脳は「でこぼこしながら育つ」のです。

子どもの脳内ネットワークは環境の影響を大きく受けながら発達していきますが、一律に影響を受け続け